

青い山

2021.6.23

今年は、山を見ている。こんなに見るのは、いつ以来だろうか。鮮やかに緑の山々が眼前に広がる日もあるが、基本的に山は青い。「青い山」とくれば、種田山頭火の「分け入つても分け入つても青い山」という俳句が頭に浮かぶ。

国語の教科書に載っていたので、授業で扱ったことがある。妙に気になる俳句であった。それは、俳句の決まり事である「有季定型」、すなわち5・7・5の17音で季語を入れるというルールに従っていないせいかもしれない。あるいは、こんな俳句を詠む人は、どんな人なのだろう、どんな人生を歩んできたのだろうと興味がわくからかもしれない。

人と話していると、特に初対面の人の場合、私に関することで聞いても二つのものが当たらないことが非常に多い。一つは年齢である。もう一つが免許（担当）教科である。特に、教科はよくもこれだけ当たらないものだと感心してしまうほどである。よく数学、体育と言われる。あるいは理科、とにかく理系である。先日は、白衣が似合うとまで言われた。

これはいったいどういうことなのか。30年も国語の先生をやってきたにもかかわらず、そうは見られない。本人は、明らかに文系の人間である。だが、そうは見えないそうである。原因がわからない。これが悩みというわけではないが、不思議ではある。最近では、こちらから「何の先生でしょう」という問題を出して楽しんでいる。

国語の先生に見えない人が、国語の授業をやっていたと思うと、自分でも心配になってくる。俳句に限ったことではないが、同じ教材を扱っても、毎回、違った指導をしてきた。山頭火の「分け入つても」の句は、季語がなく、17音でもない「無季自由律俳句」である。それだけに、かえって想像がふくらむ。生徒に想像することのおもしろさを味わわせ、俳句への興味をもたせるには、いい教材である。ただし、生徒に俳句をつくらせ句会を開く場合には、有季定型を守らせる。

この句に対する疑問がいくつかある。山に分け入ったら、山は青ではなく緑ではないのか。それとも信号機の緑を青と言うように、緑の山を青い山と表現したのだろうか。いや、実際には、山に分け入ってはいないのではないのか。あるいは、「青い」とは若さを表しているのか。入ってではなく「分け入って」である。前に進むのが、たいそう難儀なイメージがわく。

この句は、「分け入つても」の繰り返しのポイントである。もし、山に分け入っても、さらに遠くの山が青く見えたとしたら、「分け入つても分け入つても」がさらに意味をもってくる。山頭火に限らず、誰にでも長い人生の中では、「青い山」があるのではなからうか。進んでも進んでも全くゴールが見えないような状況である。だから、多くの人が、この句に共鳴したり、この句から考えさせられるのではないか。

今、この句で授業をやれば、昔とはまた違った授業ができたかもしれない。目の前の青い山を見ながら、そんなことを考えた。調べれば、この句のことも、山頭火のこともわかる。だが、それではおもしろくない。句を味わうとは、知識として調べることではないだろう。瑞々しい感性をもった中学生は、この句をどのように読むのだろうか。

それにしても、この前、私が国語の先生だと知ったときの生徒の反応はすごかった。そんなにも国語の先生に見えないのかと再認識させられた。いっそのこと、数学の先生ということにするか。